



食を通じて 子どもたちに生きる力を！

恩返し！

2012年4月4日、私の新たなスタートの日。それは初孫の誕生であった。

同居をしていた義父母が、惜しみない愛情で私たち夫婦の子どもたちを育て、見守ってくれていたように、私も娘家族を見守りたかった。義父母への感謝と恩返しは直接できなくなってしまうが、今度は私の番と思い、2012年3月末に55歳で早期退職した。が、結局、娘家族は孫が7カ月の時に海外暮らしになり、私の恩返しは頓挫した。

早期退職をするには、そのほかに理由が2つあった。1つは「今まで地区役員等も引き受けることがなかった私が、いかにして地域貢献できるか試してみたい」ということ。そしてもう1つは「学んでいた心理学を深めていきたい」ということであった。

生き方のヒントをくださった人との出会い

地方公務員生活の中では、たくさんの素晴らしい方々と巡り会った。中でも、退職を決意する4年ほど前、地区センターに勤務した時のことである。その人は、地区社会福祉協議会の女性会長さんであった。ニュータウンであるその地区は、高齢化が進み、丘陵地のながめのよい緑豊かな所が、坂道で買物にも大変な所となっていました。

その会長さんは、地区の中心地に近いマンションの集会所を利用したサロン運営の実現に向け、理事会に掛け合っていたのである。結果、トイレまで改修でき、月1回のサロン開催が実現した。その集会所の周りには木々に囲まれ、まるで高原の避暑地にでも足を運んだような環境であった。

サロン運営では、住民たちが手作りのケーキ、テーブルクロス、ランチョンマット

など得意なものを提供した。結果的に、高齢者だけでなく、孤立しがちな専業主婦もリピーターやボランティアとして運営に関わるようになった。さらに、学校の空き教室を利用し、デイサービスまで始めた時は、驚きであった。

ほかに、子育て中のママたちを対象に託児付きの料理教室を開催した。もちろん、託児でお預かりするのも住民ボランティアであった。そこでのメニューづくりや調理指導は、その地区のヘルスメイト（食生活改善推進員）の方々が担ってくれた。

その会長さんは、あらゆる年代への地域福祉サービスの提供を生み出した。先見性と課題解決のためのアイデアが豊富であり、何と言っても行動力が見事であった。

この時、私も退職したらこの会長さんのように、自分の住んでいる地区の課題を捉え、地域福祉サービスを提供したいという夢が膨らんだ。



本多 孝子

子ども食堂「はまっこてらす」

運営団体代表

【ほんだ・たかこ】1978年厚木市役所入職、2012年退職。退職後最初のボランティアは、住まいがある小田原市の子育てサロン。現在、小田原市の地区社会福祉協議会の理事、生活支援サービス団体役員も務める。コミュニティカウンセラーの資格を活かしNPOの電話相談員等でも活動中。



ヘルスメイトの仲間たちと（写真中央が本多さん）

ヘルスメイトって何？

奇しくも、その後、私は仕事でヘルスメイトを養成する担当課に異動した。

ヘルスメイト養成講座は各市・町で開催されている。住民参加型のボランティアであり、地域の健康づくりを担い、また地域における食育推進の担い手としての食育アドバイザーでもある。

講座の内容は、食品衛生、健康づくりと食生活、調理実習などである。年1回、講座受講者が募集され、講座は全8日間に亘る。受講料は調理実習の食材料費として4500円程度である。

私は食えることと料理を作ることが好き

であったので、ボランティア活動の最初のチャレンジとしては、恰好の講座であった。2012年度のヘルスメイト養成講座を受講し、修了後の2013年度には、ボランティア団体である「食生活改善推進団体」に加入した。

現在、ヘルスメイトの仲間と保育園などに訪問し、手遊び、紙芝居、エプロンシアターなどを駆使し、食育活動を行っている。かわいい子どもたちに会え、笑顔の見送りに喜びを感じ、充実感を味わっている。

子ども食堂を始めようと思ったきっかけ

私は基礎から地域福祉を学びたいと考え、2013年度から2年間、NHK学園の通信教育でコミュニティボランティアを学んだ。そのカリキュラムの中にテレビの視聴科目があり、広島県の元保護司の女性の活動が取り上げられていた。貧困ゆえ、弟や妹のために万引きした少年らの更生を助けるため、その女性は自宅で食事を提供していた。少年らの近況などを聞きながら、お腹いっぱい食えることを勧めていた。私は女性が言った「お腹がすくと悪さに走る」という言葉が忘れられずにいた。

そんな折、貧困などにより自宅で十分な食事が取れない子どものために無料またはわずかな金額で食事ができる「子ども食堂」をメディアが盛んに取り上げ、東京の下町を中心に運営団体が立ち上がり、いろいろ

見聞きする機会が増えてきた。

子ども食堂のことを見聞きする度、視聴科目で見た広島県の活動の印象がよみがえり、自分の住んでいるこの地区にも、絶対に貧困世帯の子どもはいるのでないか、声を上げられず頑張っているひとり親がいるのではないかと勝手に推測した。

ちょうど、地区住民のボランティアが安価で草むしりや掃除などを行う「生活支援サービス」のコーディネーターとして活動していたこともあり、少し地区の実情も見えてきていた。全国的組織である「こども食堂ネットワーク」での先進団体の皆さんは、口を揃えて「とにかく始めてみませんか」と言っている。不安がなかった訳ではないが、私がやらねばならないと変な使命感で決意をしたのは、2015年の暮れであった。

そして2016年1月に、家族である夫と息子に相談した。家族は、私が生きがいのようにボランティア活動をしていることを快く思っていたようで、理解をして賛成してくれた。

子ども食堂「はまっこてらす」の産声！

家族の賛同を得て、私は子ども食堂の運営の実現に向け真剣に考え始めた。関連図書を読み、インターネットから情報を得て、久しぶりに没頭した。

読み漁っていくうちに、自分だけ空回り



しているのではないかと急に不安に思った。誰かに背中を押してもらいたかった。そこで民生委員に貧困の現状を聞いてみた。すると「実際に貧困家庭はいるよ」と答えてくれた。ここで心が決まった。「貧困家庭があるのなら、子ども食堂という受け皿をつくっておくのもよいのではないか」という結論に達した。

しかし、テーマである「貧困」がひとり歩きしても困る。そこで、「1人で食べるならみんなと食べよう!」を合い言葉に、「孤食」をテーマにした。

次に運営団体をどうするかである。新規にボランティア団体を立ち上げるより、既存の団体を使えば早いと思った。

そこで、私も所属している生活支援サービスを提供する団体に、子ども食堂の運営を一緒に担ってもらえないだろうかという提案をしたのである。ここで私の浅はかさが露呈した。敢え無く撃沈、大反対を受けた。その団体のコーディネーター数名からは、「これ以上、自分たちにやらせるのか!」と大反発を受けた。要するに、説明が不十分であり、根回しが足りなかったのである。日頃、率先して地域福祉の担い手として活動しているコーディネーターなら理解してくれるのではないかと思い込んでいた。実

に安易であった。

既存の団体がダメとなれば、新たなボランティア団体をつくるしかない。子ども食堂の運営は人と場所が決まればできるということだったので、スタッフ探しから始めた。まずは調理に携ってもらうスタッフで、これは食育活動を一緒に行っているヘルスマイトに声を掛けた。すると1人が「あなたがやるなら、協力は惜しまない」と言ってくれた。それは私が3年間取り組んできた地域貢献が認められた瞬間であり、とても嬉しかった。他のヘルスマイト3人からも了解が得られた。

次に、もう1人核となる方をと考え、地域のボランティア活動で経験豊富な先輩にお願いしてみた。こちらも了解が得られ、自分も含め5人で団体の準備会を2016年3月に開催し、設立日をこの日とした。その後、地域役員の活動で親しくなった方々を口説き加わってもらい、コアスタッフは10人になった。

もう1つの課題であった開催会場は、スタッフのお陰で市の集会所が借りられることになった。地区自治連合会会長にオプザーバーになってもらったことにより、地区自治連合会の後援も受けられるようになった。

4月に総会を開催し「チーム・そよ風」が産声を上げた。子ども食堂「はまっこてらす」が誕生したのである。「はまっこてらす」という名前は、浜辺が近くにあることと、浜公園という公園がすぐ近くにある

こと、そして大人たちが子どもたちを温かく照らしていくという意味で付けた。

子ども食堂「はまっこてらす」は6月にオープンし、現在は月1回開催している。対象は「孤食」の子どもとその親、地域の大人。ということは誰でもいいのか? その通り。誰でもいいのである。オープンから4カ月を経た現在、子どもたち(主に小学生)が30人ほど来店している。

立ち上げてよかった

思い起こせば、私が小さかった頃、お向かいのお宅に遊びに行き、「ご飯食べていきなよ!」と言われると「うん」と答え、ちゃっかりいただいている様を見て、迎えて来た母が恐縮しながらも、お礼を言っていた。それは、特別なことではなく、普通のことであった。

現代では、子どもたちにとって友人と一緒に取る食事は非日常なことであり、特別なことのようにだ。その食事の前の時間も、子どもたち同士が仲良く、ゆったりと遊んだり交流したりして、実にいい感じである。「はまっこてらす」にはゲーム機を持ってくる子どもがいないのは、不思議である。学習支援ボランティアをお願いしている教員OBの出番は、今のところない。子どもたちと卓上ゲームの四目並べをしている大人も、楽しそうである。食事だけでなく居場所の提供にもなっている、そんな光景を

見ていると、私は「こういう場所が必要だったんだ。立ち上げてよかったな」と思うのである。

ある時、ひとり親家庭ではないかと思われる家族が食べに来た。少し暗い感じの家族。食事の後、帰りがけに私が「来月もママに会えたら嬉しいんだけど」と声を掛けるところ、「はい」という返事が返ってきた。ステキなママの笑顔付きであった。支援していくことの大切さや喜びを感じた瞬間であった。

心理学で学んだことを実践できることは、嬉しいことであり、私の勇気づけの言葉で子どもやママたちが元気になっていくのを感じるができるなんて、なんて幸せなのかしら。

チーム・そよ風を 立ち上げてから

人とのつながり、ネットワークには、本当に感謝である。地域のいろいろな団体の方々から、激励をいただき、お会いした方からは「何人くらい子どもたちが来ているの？」などと聞かれると、嬉しいものである。地区内で関心をもってもらえるということは、知名度を得たということであり、なんだか少し誇らしく感じる。

子ども食堂の運営だけで よいの？

「はまっこてらす」では、子どもたちに



簡単な調理は子どもたちにもお手伝いしてもらう

簡単な調理や盛り付けと一緒にやつてもらっている。スティック野菜など、包丁で上手に切ることができるようになった6年生男子。家ではお手伝いをしていないということだった。そんな時間があれば、勉強しなさいと言われるていると。

今度の春休みには、お米のとき方や味噌汁の出汁の取り方、おにぎり作りの実習を企画しているところである。お米さえあれば、お腹がすいたら自分でお米をといで、炊飯器に入れ、スイッチを入れることで食事ができることを体験してもらおうと思っている。少し大げさかもしれないが、1人でも生き抜いていく力をつけてもらえる、小さなきっかけになればと思う。

このような体験型のイベントを企画しつつ、保護者にも寄り添えるような支援をし

ていきたい。子どもが生まれたら、誰でも自然とつっぱな親になると思うのは間違いである。親も若葉マークなのである。大変なことだらけの育児では、想定外のことばかり起こるのだ。

心配事は、自分の母親に相談したり、先輩ママに相談したり、インターネットで調べてみたりするのだろうが、それぞれ違うことを言ったりする。祖父母世代の回答は特に問題が多い。自分の経験を引っ張り出してきては、迷わせるからだ。そんな時にも、「はまっこてらす」は相談できる場所でありたいと思う。

私は市役所勤務の中で、子育て支援センター、児童クラブ、虐待・DV相談などに対応する部署に配属されたことがあった。職務で関わるケースは、当然のように重いケースばかりであった。たくさんの方の不幸な子どもたちに遭遇せざるを得なかった。

今、私の住んでいるこの地区で、寂しさを感じている子どもがいれば、手を差し伸べていきたい。輝かしい未来のある子どもたちを、不幸にはしたくないのである。地方公務員として培った知識や経験は、要するに、退職したことでは途切れていないのである。つながっていて、いつでもアウトプットできるのである。

今、私はボランティア活動を楽しんでいる。民間人になれば、自分の努力でやりたいことができるし、言いたいことも言える。責任は自分で取ればよいのである。